

ヴォーカル&ピアノと、ドラムのみという特異な編成もさることながら、アマンダ・パーマー、ブライアン・ヴィグリオネが繰り広げるダークなアート指向のシアトリカルな音世界が、デヴィッド・ボウイやパティ・スミス、トレント・レズナー（ナイン・インチ・ネイルズ）らにより絶賛されたザ・ドレスデン・ドールズ。日本でも2005年のフジ・ロック・フェスティバル出演で一気に注目度が上がったが、この2作目「イエス、ヴァージニア」は、そんなグループのさらなる進歩と深化を実感させる仕上がりに。二人の協調とせめぎ合いがより濃密でスリリングなものになることで、バンドとしてのダイナミズムがヴィヴィッドに息づき、楽曲の自由度もさらなる高まりを見せている。

「それはたぶん、2年くらいツアーをやってきた成果だと思う。感性が豊かになったのはもちろん、二人の考え方や趣向も合うようになってきているしね」（ブライアン）

芝居にたとえるならば、前作はアマンダが主演、ブライアンが脇役だったのに対し、今作は彼女が主演、彼が準主演。まさに二人の演奏は、男女間のさまざまな人間関係を描いた二人芝居を観ているかのようだ。

「だからこそその編成なのよ。ほかのメンバーがいたら、二人だけの会話に加减が出たりするでしょ。たとえば〈セックス・チェンジ〉なんかは、5年前に初めて二人でリハーサルした曲で。それまでの私は、曲を完成させてくれるパートナ



ーを探していたの、で、この曲をやった途端、ソウル・メイトが見つかったって感じたわ。でも、前作はレコーディングの段階で楽曲が完成していたところもあって、それに比べ、今回はブライアンもアイデアやヴォーカルを自由にすることができたんじゃないかしら。彼自身の歌も成長したと思うしね。まあ、「さまざまな人間関係」うんぬんということに関しては、普段の生活の複雑さが音楽に表われているのかもしれないけど（笑）」（アマンダ）

なお、「イエス、ヴァージニア」というタイトルには、元になった逸話があるという。8歳ぐらいの女の子が、目に見えないものを信じちゃいけないんじゃないかと思い、ラジオ局に「サンタクロースは本当にいるの？」と手紙を送ったというアメリカでは有名な話で、受け取った側は「ヴァージニアにいるよ」と答え、目に見えないものでも信じ

なさいと彼女に夢と希望を与えたとか。「〈ミス・オー〉にもこのフレーズが出てくるんだけど、元々の希望があるってことに対し、この曲ではコントラストとして真実に救われることはないってことを歌っているの。バンド名も、戦争と希望の対比として「ドレスデン・ドールズ」だし、私自身、「コントラスト」を付けるのって好きなやり方なの。だって、望みのないところには望みがあるし、逆に望みのあるところには望みがないものでしょ。光と影にしてもそう。それに、私はパーフェクトな曲を作るのに、ちょっとだけマイナス要素を入れたくなったりするほうでもあるし。そう言えば、日本にも完璧な絵にあえて傷を付け、その絵の価値を上げることがあるんですけどね」（アマンダ）

取材・文／見玉常利

Artists Interview

ROCK&POPS

ザ・ドレスデン・ドールズ

THE DRESDEN DOLLS

New Album

イエス、ヴァージニア
(RR-RRCY-21259)



CD LIST

●ザ・ドレスデン・ドールズ
(RR-RRCY-21244)

強いコントラストから浮き上がる
さまざまな人間関係を描いた二人芝居

PROFILE

2000年にボストンで結成された、アマンダ・パーマー (p, vo) とブライアン・ヴィグリオネ (ds) の二人組。2003年にアマンダの主宰するレーベル「Eight Foot Records」からファースト・アルバム『ザ・ドレスデン・ドールズ』を発表。翌年契約したロードランナー・レコードから再リリースされ、シアトリカルなライブの高い評判とともに話題となり、ナイン・インチ・ネイルズのサポートを務める。2005年にはフジ・ロック・フェスティバルに出演した。